414
A 959

條約改正新論

イ、ベンシン、スミツ氏？

外務卿閣下

閣下ノ招ニ應シ叅列スルノ光榮ヲ得シ過日ノ商議ノ件ニ付キ再三熟考セシニ余ノ論旨ハ更ニ変易セサルノミナラス却テ之ヲ鞏固ナラシメタリ

閣下ノ請求ニ從ヒ余ノ志想ノ要領ヲ開陳スル一書ヲ呈スルニ際シ首トシテ左ニ掲クル所ノ事件上二三ノ大意ヲ述ント欲ス

第一　條約中至急ニ改正セント欲スル如何ナル点ニシテ而シテ多少ノ短期間ハ尚ホ遲緩

大正十一年四月
大限侯爵邸寄贈

栗本貞次郎譯

シ得可キモノハ如何ナル点ナルヤ

第二　外国トノ會議ヲ為ス可キ地ハ何ニナルヤ

第三　該外国ノ一若クハ二三ト特殊ノ條約ヲ結フハ果シテ裨益アリ且之ヲ結フヲ得可キモノナルヤ

然シテ後最モ至急ナリト思惟スル所ノ第一ノ問題中新タニ加入ス可キ基礎ニ付キ余ノ意見ヲ陳セントス

第一款

第一

舊政府ノ柔弱且ツ経験ニ乏シキニヨリ減少セシ所ノ獨立国ノ権利ノ全部ハ不遠シテ日本国ニ於テ固ヨリ復有セサル可ラサルヤ必セリ

若此時ニ當リ日本政府ハ其国ヲメ鎖国ノ論意ヲ固守セサラシメンニハ該国ハ他国ト結ヘル條約上ノ普通ノ則ニ通暁シ且他ノ適比スルモノヲ得スシテ諸譲典ヲ為スヲ承認セサルベシ

若開国ノ件ヲメ他国ノ要求ヲ茨タス日本国自己ノ意ヨリ出シメンニハ該国ニ負荷セシ條款ニ比スレハ其国益及国躰ニ最モ相當ナルモノヲ條約中ニ掲載セシナラン

外国ト通好セシ當初ノ景状ニ循テ論スルモ亦第一回ノ條約ハ外国ト亦モ其要求スル所ハ温和ニシテ加ルニ最モ寛裕ナル所為ニ止マリシ亜英両国ト結ヒシ第一回ノ條約中ニハ治外法

権ノ件ヲ掲載セス

外国ニ於ルヤ日本政府ノ柔弱且昏暗ナルヲ知了セシ日ヨリシテ甲乙相踵キ漸次ニ其気燄ヲ逞シ其要求ヲ擅マニセシノ外ナラス

長久歳月ノ間新定各條約中日本ト交誼ヲ通スル所ノ外国ノ有スル権利ヲ増加セリ即チ最モ親密ナル邦国ノ権利ヲ他ノ諸国一般ニ付与スル所ノ特例ニ基キ一国ニ新タニ附与セシモノアレハ他ノ諸国モ亦悉ク之ト同一ナル可キ権利コレナリ

此論意タルヤ敢テ旧政府ヲ誹評スルノ意ニ非スシテ可成速カニ常初ノ形状ニ復舊ス可キ現今政府ノ確乎不拔ノ決意ヲ鞏固スルニアリ

外国ハ日ヲ追テ日本ノ権利ヲ侵凌セシ事ヲ會議前送付ス可キ文書中ニ掲載ス可キモノナリト思惟ス

但シ前記ノ件ヲ以テ譴責又ハ辨駁ノ事故トナサス只此續次ノ譲与ヲ釀成セシ景状ハ彼是共ニ一時且假定ノモノト認メシニ過キスシテ日本国ノ未タ世上ニ知ラレサルニヨリ前途ヲ圖リ信用ノ薄キカ故ニ之ヲ実施セシトハ亦モ其国ヲ開キシヤ已ニ二十年ヲ過キ帝政復古ヨリ已ニ十年ヲ経シ今日ニ至リテハ前記ノ理由ハ已ニ存セサルモノナリト論スルヲ得可キナリ

之ニ加ルニ現今政府ハ目下直ニ諸権ヲ悉ク復有セントト欲スル所意アラサル事ハ余モ亦同論

ニシテコレ公義正理及ヒ万国公法ノアルアリ
以テ能ク該国ヲ輔翼シ其已ニ端緒ヲ開キシ権
利復有ニ付キ全捷ヲ得セシムルノ日アルヲ該
政府ハ了知スルヲ以テナリ
此温和ノ處分ハ甚タ善良ナル政畧ニシテ余ノ
敢テ間然スルナキモノナリ
至急ノ改正ヲ要ス可キ諸件ハ已ニ殆ンド一定
セリ即チ左ノ如シ
一　輸出輸入ニ付キ海関税ヲ日本国ニ於テ自
由ニ整定スルノ権利
二　通商規則（トレードレギュレーション）ト稱スル規則ヲ
変改スルノ権利就中海関税納付及ヒ開港場警
察法ヲ確固ナラシムル諸件ニ付キ

三　日本国人ヲ限リ沿海通航ノ権利ヲ承認セ
シムルノ論アリ此件ニ就テハ日本国ノコレマ
テ敢テ失ハサリシ所ノ権利ヲ以テ改正ニ依リ
有スルカ如ク看做サヽラシメンカ為メ其論方
上ニ注意アランヲ要ス
此三個ノ件ニ尚ホ左ノ諸件ヲ添加スルヲ至當
ナリト余ハ思惟セリ
四　外国ヨリ来レル船舶及ヒ商物ニ関スル権
利ヨリ尚ホ一層廣濶ナル行政規則及ヒ行政警
察ヲ設定スルノ権利
五　全国且地方違警罪裁判ノ権利
六　日本人民ニ照行ス可キ邑税又ハ一般ノ税
ヲ外国人ニ照行スルノ権利但シ該税ハ地租又

ハ居留地税ト混合セサル件ヲ限ル

山ナ個ノ問題ハ此書ノ第二款ニ於テ數問ノ詳説ヲ述ント欲スルカ故ニ茲ニ陳述セス

第二

會議ノ地ハ何レナル可キヤ

外国公使ト此件ニ付キ商議ノ端緒ヲ開キシ時ニ当リテハ此會議ノ地ヲ以テ東京トナスハ人更ニ疑ヲ容レサリシモノナリト余ハ思惟ス

一　此地タルヤ最モ関係ノ大ナルモノ則チ日本政府ノアル所ニシテ他ノ諸国ハ各其政府ノ在ル所ヲ殊ニシ外国ノ一ヨリシテ其地ニ他ノ諸国ヲ集會セシムルノ名義ヲ特有スルモノアラサルナリ

二　他ノ諸国ハ東京(或ハ横濱)ニ各其委員ヲ有シ其実此委員ノ意見ノ補助ニ依リ以テ所置スト言フモ敢テ不可ナル勿ル可シ故ニ此集會ヲ他所ニナストキハ各政府及ヒ其委員ノ間ノ通信ヨリシテ限リ無キ遅緩ヲ発生ス可シ

假令會議ノ為メ擇ヒシ地ニ委員ハ来ル可シトス雖モ其考証ニ必要ナル可キ文庫及ヒ書類ヲ携帯スル能ハサルカ故ニ通信ニ付キテノ遅緩ハ到底免カルヽヲ得可ラサラン

三　日本政府ニ於ルモ亦同上ノ理由ヨリシテ會議ヲ東京ニ設クルハ必要ニシテ論議ノ際発主スル問題ニ付キ其国委員ヨリ出シ能ハサル所ノ証明ヲ要ス可キカ故ナリ

四　加之関係ノ最モ大ナルモノヲメ其政府ハ
甚タ隔絶セシ一委員ノミノ他ハ會議ニ列スル
ヲ得セシメサルヿハ正理ニ適スト言フ可ラス
且此委員ハ他ノ全権委員トノ論議ノ合セサル
ヿハ最モ屢次アル所ノモノナレハナリ
若東京ニ於テ會議ヲ設クルトキハ以上ノ難事ハ
悉皆消滅ス
余ハ之ニ加ルニ現今マテノ條約ハ悉ク東京ニ
於テ結ヘルモノニシテ此條約改正ニ至リテハ
他所ニ於テ為ス可シト言ル理由ノ存セサルヲ
以テス可シ
此改正ノ件ハ元来各條約中ニ預言シ且許可セ
シカ故ニコレヲ以テ自然ノ順序ト言フモ不可
ナルナシ
日本政府ハ此点ニ於テハ巨大ノ抗論アラント
恐懼セスシテ可ナリ其理ハ外国各々自矜ノ情
アリ他国ノ一ヲ擇フニ方リ其協議ノ一致ス
ルハ甚タ難カル可シト雖モ東京ヲ撰フトキハ
国各個ノ国躰ヲ損傷セサルヲ以テナリ
此論意ハ相互(甲国ヨリ乙国ニ對シ)ノ国躰ニ適
スル所ノモノニ付テハ各自其審定者タル外国
ノ為メニ供スルニ非ス然リト雖モ若日本政府
ニ於テ之ヲ以テ理アリトナスニ於テハ集會ノ
地ヲ東京ト做スヲ承認スルヲ以テ外国ヨリ日
本ニ為ス第一ノ譲与トナスハ許容セサル可シ

第三

一国又數国ト特殊ノ條約ヲ結フハ神益ニシテ
且之ヲ倣シ得可キモノナルヤ
此二個ノ件ハ余ハ然リト答フ可シ
余ハ首トシテ其神益タルヤ何モノナルヤヲ述
ヘ次ニ如何ナル理由ヨリシテ倣シ得可キヤヲ
説明ス可シ
一 其神益タルヤ則チ左ニ掲ルカ如シ
改正ニ付キ至大ナル難事ノ一ハ敵手ノ多数ナ
ルニアリ即チ甲ハ悪意ヲ挾ミ乙ハ私見ヲ抱キ
他ヨリシテ知了シ能ハサル所ノ競争ハ共ニ協
同商議ノ為メ妨碍ヲナスモノナリ
一国ヨリ倣サント欲スル所ノ譲与アリシカ為
メ恐ラクハ他国嫌疑ヲ来スアル可シ

若シ互ニ相研究スルニ止マル片ハ其論意ノ駁
多ナルハ事理ヲ明亮ナラシムル最モ多シト雖
モ茲ニ言フ所ノモノハ之ト異ニシテ外国ノ為
メニ論スレハ其神益タル一分ヲ抛棄スルニ係
ル件ニシテ而シテ日本国ヨリ倣シ得ル所ノ該
与ハ其請求スルモノニ比スレハ假令ヘ此請求
ハ権利ヲ有シ正義ニ合シ道理ニ適スルモノナ
リト雖モ之ヲ同一視セサル可シ
故ニ集合セシ諸国ノ内甲又ハ乙ヨリメ日本ニ
反對ス可キ所ノ道理ニ原キ又ハ之ニ原ツカサ
ル諸論議ヲ発生スルヤ期シテ俟ツ可キモノニ
シテ之ヲ論駁スルハ獨リ日本政府ノミナル可
ク其理ハ外国全権諸員ノ内一モ日本ノ為メ亟

言スルヲ欲スル者ナカル可ク假令其意アルモ
恐ラクハ発言スルヲ敢セサル可キカ故ナリコ
レ他ナシ日本ニ歓心ヲ得ルカ如ク看做サレン
ヲ恐懼シ又恐ラクハ其政府ヨリノ委任ニ負ク
ト思惟スルヲ以テナリ
若日本政府ハ孤立セシ一国ト條約ヲ結ヒ得可
キ件ハ前記ノ危害ハ更ニ現出セス
其負数及ヒ威力ハ彼此相同カル可シ
加之外国ハ特殊ノ條約ヲ結フカ為メ其端ヲ開
クヲ許容ス可キ単一ノ理由ヨリシテ至重ノ譲
与ヲナス可キヲ大畧承認ス可シ
此他又日本国ヨリ做シ得可キ譲与ニ分キ該国
ハ最モ感激ノ意アル可シコレ少クモ若干ノ期
限ノ間ハ其裨益ヲ擅有スルノ預算アルヲ以テ
ナリ
若日本ハ此ノ如キ特殊ノ條約ヲ孤立セシ一国
ト一旦結フニ於テハ他ノ諸国ハ此国ト競争ス
ルノ念慮ヨリシテ最モ親睦ナル邦国ニ係ル特
例ニ基キ同一ノ裨益ヲ請求センヤ殆ンヽ必ヤ
リ
外国ノ為メ條約ヲ分割シ譲与ヲ承認セスシテ
裨益ノミヲ付シ得可ラサルヿハ判然ナリ此ノ
如キ思像ハ正理ニ適スト云フ可ラス而シテ若
此思像ノ発生スル件ニ方リテハ之ヲ撲滅スル
ハ難キニアラス入口ニ最モ膾炙スル法律ノ主
義ヲ以テ論スレハ契約中ノ數種ノ特例ハ分割

スヽ可ラサルモノニシテ之ニ依リ裨益ヲ得ント欲スル者ハ従テ義務ヲ負擔セサル可カラスト云ヘルヲ以テ足リトス

外国ト結ヒシ條約ハ外国ノ為メ已ニ正義ノ大本ヲ表彰セス（但之カ為メ其交際術ノ巧妙ナルトノ称誉ヲ与フルニ非ス其理ハ此点ヨリ論スルモ亦欠点アルカ故ナリ）ト宜氏若該條約中最モ親睦ナル邦国ト結ヘル條約ヲ分割スヽ可シト云ル不條理ナル文意ヲ掲載セリトノ見解ヲ下スヽ者ハコレ嫌悪ス可キ不正ノ極ヲ含有スト言フ可シ之ニ加ルニ此ノ如キ信ヲ措クニ足ラサル思想ノ発生スルニ方リテハ日本ヨリ之ヲ論破スルニ付キ特殊ノ條約ヲ結ヒシ邦国ノ扶援ヲ得可シコレ此邦国ハ譲与セシ裨益ヲ擅有スルニ非サレハ此條約ヲ結ハサリシカ故ナリ而シテ若此邦国ハ他ト其裨益ヲ分有シ其做セシ譲与ヲ独任スル片ハ前記ノ件ト及シ最モ不利ナル景状中ニ在ルモノナリ

日本国ハ一国ヲ限リ之ト特殊ノ條約ヲ結ヒ得ヘキトノ想像アルニ於テハ今ヨリ直チニ君主ニ属スル舊権ヲ完全実行シ且談国ニ在ル外国人裁判ノ権ヲ合セテ要求ス可シト余ハ断然確言ス

然ランニハ此條約ハ勉テ完全ナルヲ要スコレ先ニ已ニ陳述セシカ如ク大畧他ノ諸国ニ亦踵テ之ヲ供用ス可キカ故ナリ

然リト雖モ外国人裁判ノ権ハ新法律布告ノ時ニアラサレハ之ヲ掲載ス可ラス

方今直チニ該権ヲ請求スル片ハ遠謀ナキモノニシテ彼ノ拒絶ヲ招クヤ殆ント必セリ此他又外国人裁判ニ係ル所ノ法律及慣習ヲ報知スルヲ彼ヨリ請求ス可ク然リ而シテ古昔ノ慣習ハ多クハ確定セス新定法律ハ多クハ急遽造為ノモノニシテ(コレ已ニ改正変更セリト雖モ)外国人ニ示ス可キ完全ナル法律ニアラサルナリ

違警罪上軽キ罪科ニ該ツ可キ法律及ヒ規則ハ日本ヨリ現今直チニ示ス可キ約束ヲ以テ該罪ニ付テノ裁判権ヲ掲載ス可シ

新定刑法及ヒ治罪法ヲ布告セシ後ハ外国人ニ軽罪ヲ照行ス可ク而シテ前記二法ヲ照行スルヿハ之ヲ実施セル翌年マテ延期ス可シ

現今已ニ汲々着手セル所ノ民法ハ此時間落成ニ至ル可ク而シテコレヲ照行スルハ他ノ二法ト同時タルヲ得可シ

此約束ニ依リ他ニ先シテ日本国ニ此敬重親睦信任ノ微ヲ表セシ邦国ハ内国ニ自由ニ来リ其地ニ農工商及学術上ノ家屋ヲ組成スルノ許可ヲ有シ能フベシ

該国且多少迫切スル期内之ニ踵キ他ノ許多ノ外国人ノ内国ニ来ルニ付キ如何ナル恐ル可キヿアリヤ

内国ニ於テ罪科ヲ犯スヲ恐ルヽヤ

此国人タル現今居留地内ニ居住スル者ヨリ罪科ヲ多ク犯スノ理ハアラサル可ク且之カ為メ忍懼ス可キ事件ノ発生セシハ未タ曾テ視サル所ノモノナリ

之ニ加ルニ日本ノ法律ヲ此国人ニ照行ス可キトノ想像ニ付キテ論センニハ現今ニ於ル治外法権ノ存スルカ故ニ内国ヲ開クヲ得サルモノナルヤハ該権ヲ奏スルカ故ニ内国ヲ閉クハ理ニ適スト云フ可シ

日本国ノ貨財ヲ悉皆外国人ノ掠取スルニ根スルヤ

此恐懼ハ無根ニシテ且敢テ思慮スルニ及ハサルモノナリ

外国人ハ日本人ト交換ト称スル契約即チ双方各々一物件ヲ付与スル所ノ契約ノ他ハ做シ得可ラス

若日本国ハ此契約ノ為メ必然損失アリトナスヤハ日本人ハ外国人ニ比スレハ其智畧ノ劣レルノ外ナラスト雖モ其実ハ然リト言フ可ラス且日本人モ亦之ヲ甘受セサル可ク其経験ニ乏シキ事ハ一種有益ナル疑心アリ以テ之ヲ補償ス可シ

我仏国ニ於テ農民社會ハコレヨリ上等ナル社會ニ比スレハ事務上経験ノ少キモノナリト雖モ農夫ハ也ノ最モ学識アル者ヨリノ欺侮ヲ受クルヲ見ス却テ之ニ及スルモノナリコレ他ノ

シ農民ハ軽躁ナラス加ルニ猜疑ノ心アリ其評益ニ明カニ銀行社員ニ比スレハ計算スルヤ遅シト雖モ其詳密ナルハ却テ之ニ勝ルハ屢次アル所ノモノナリ

外国人若内地ニ於テ農事ヲ為サント欲スル者ハ首トシテ一地ヲ借受ケ又ハ購求ス可ク而シテ多クハコレマテ未タ開墾セサリシ地ヲ購求ス可シ而シテ此地タルヤ農夫ヨリ賣与スルニ非スシテ舊諸侯、村邑、又ハ邦国ナル可シ外国人ノ之ヲ購求スルハ究テ廉價ナル可キハ疑ナシト雖モ日本国ニ持来ス所ノ價額ハ方今甚タ必要ナラン吾佛国ニ於ルハ已ニ千八百十九年ニ於テ外国資本ヲ蒐集スル為メニ(千八百十五年外国ノ軍資償補ノ為メ)佛国内不動産ヲ購求シ且此所有ノ権ヲ他人ニ轉移スルヿヲ外国人ニ許可セシノ外良策ナカリキ

外国ノ貨ヲ以テ購求セシ此土地ハ葡萄又ハ橄欖ヲ植ヘ(以国人及ヒ佛人)草場又ハ牧場トシ(英人)而シテ内国ノ生活上又ハ輸出ノ為メ産物ヲ増加ス可ク若内国ニテ之ヲ使用スル者ハ外国ヨリノ購求ヲ減少シ課税ス可キ物件ハ従テ国庫ノ利益ヲ増加ス可シ

若外国人ハ製糸場ヲ建設セン者ハ徒手ノ者ヲ傭役スルノミナラス加ルニ輸出ス可キ産物モ亦増殖ス可シ

亜国人ハ日本ニ於テ未タ実益ヲ有セサル所ノ

鉄銅採出ニ供スル器械製造所ヲ建設スヲ可シ
コレヨリシテ巨大ノ費用ヲ出シ以テ農具又ハ
工業ニ供スル器械ヲ購求スルニ及ハスシテ坐
ラ之ヲ得ルニ至ル可シ
都府近傍ハ欧洲ノ果実及ヒ野菜ノ培養ヲ為シ
中等社會ノ食料大ニ増加改良ノ事アル可シ
此事業タルヤ悉ク外国資本ヲ以テ給与スル所
ノ国人ヲ使用スルニ着眼スルヲ要ス其理ハ外
国人ノ此地ニ来リ一業ヲ興ス者ハ自国ノ職工
ヲ率ヒテ来ラサルヲ以テナリ
内国ヲ開クノ論意ニ及スル者ハ左ニ掲クル最
上ノ理論ヲ以テ説破セント思惟ス可シ曰ク凡
ソ外国人ノ日本ニ於テ之ニ従事スル者ハ余輩

ノ為メニ之ヲナスニ非スシテ其志賊貨ヲ得シ
ト欲スルニアリ然リ而シテ此賊貨ハ吾国ニア
ル吾土地ヨリシテ得ルモノナルカ故ニ到底吾
損失ニ帰セサル可ラスト
此点ニ於ル経済上至大ノ誤謬ト云フ可シ其理
ハ外国人ハ日本地ヨリシテ賊貨ヲ得ルヤ其実
真ニ然リト雖モ日本人モ亦彼ト同一ノ利益ヲ
得ルコレナリ抑モ此地タルヤ何人タルヲ論セ
ス更ニ物産ヲ生セサリシ(余ハ未タ開墾セサル
地ヲ以テ此一例トス)ト雖モ今ヤ二人ノ為メ即
チ外国人及ヒ日本人ノ為メニ生スルモノナリ
當初更ニ可等ノ物産ナカリシカ外国人ハコレ
ヨリ十個ヲ生セシメ内五個ハ自己ノ為メ餘ハ

五個ハ日本ノ為ニス然ランニハ損失セシハ何
人ナルヤ更ニ之ヲ失ヒシ者ナク各個利益ヲ得
ザリシナリ
余ハ茲ニ一例ヲ掲ク可シ
一舊諸侯アリ未タ開墾セサル一万坪ノ地ヲ山
間ニ有シ昔時ハ此地ニ於テ遊猟セシニ年已ニ
老ヒ再ヒ其意ナク二十年ヲ期シ收獲ヲ納レシ
メ以テ之ヲ貸与セリ（隷農）
莊戸ハ之ヲ開拓シ之ニ播種シ之ニ水ヲ漑灌シ
而シテ善良ノ收獲ヲ得其一半ヲ自己他ノ一半
ヲ該諸侯ニ納付ス
然ルトキハ之ニ付キ損失セシハ何人ナルヤ莊戸
ナルヤ、否、莊戸ハ所得アリ其理ハ地ヲ有セサル
トキハ收獲ヲ得ル能ハス且コレヲ有セサリシモ
ノナレハナリ
然ラハ果シテ諸侯ノ損失ナリヤ否其理ハ其地
ヨリ更ニ收獲ヲ得サリシモノナリシニ方今ハ
カヲ労セスシテ收獲ヲ得レハナリ
之ニ加ルニ此莊戸ハ日本人ヲ傭役シ且之ニ工
銭ヲ給与シ二分五厘ノ税額ヲ納付シ内国ノ食
料ヲ増加セリ其理ハ米麥ノ賣售スヘキモ許多
ナルカ故ニシテ運輸者モ亦所得ヲ得之ヲ概言
スレハ悉皆ノ所得タリ
一一国人ニ日本内国ヲ開クカ為メニ日本ノ
裁判権ヲ承認スルニ付キ卒先スルヲ肯スルヲ
一外国ヨリ得ルニ至ルハ倣シ得ヘキモノナハ

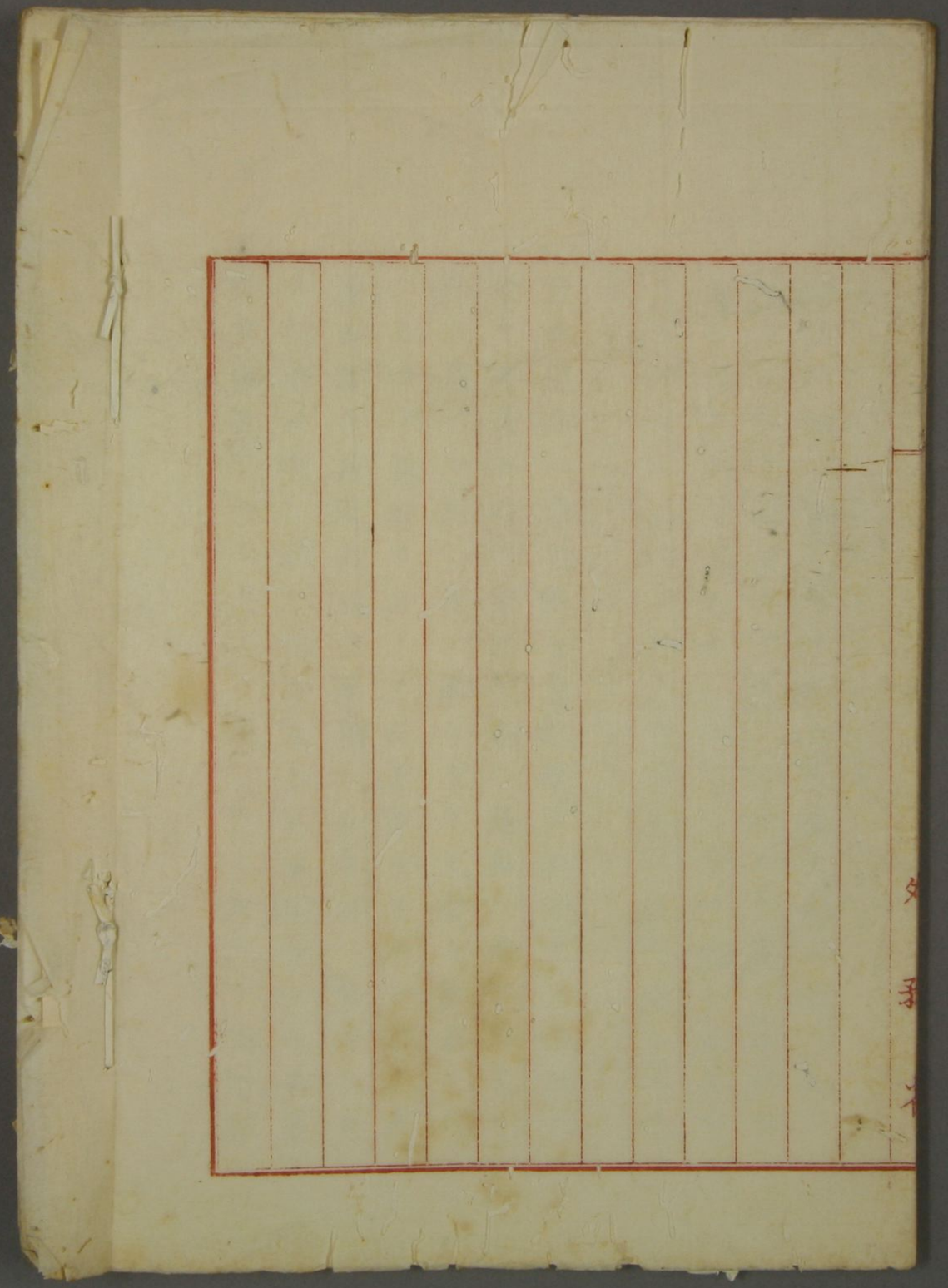
ヤ

十五日前ハ余ハ之カ為メ疑惑ヲ有シ将タ然ラカルモ之ヲ確保セサリシカ今日ニ至リ日本政府ハ之ヲ倣シ得可キヲ知了セルカ故ニ其言フ所ヲ確信シ且之ヲ秘シテ必ラス他ニ洩サヽル可シ

日本国ニ此信任且親愛ノ情ヲ彰表セル邦国ハ真ニ貴重ス可キモノナリ

此邦国タルヤ至独ノ国ニ非ス又至小ノ国ニアラス此中間ニアルモノニ適ウセリ

此邦国ハ敢テ巨大ノ事業ヲ為サヽル可シト雖モ後来ニ至リテハ最モ赫灼タル変選ノ地位ヲ預造スルモノナリ

伯耳義国ハ必ラス之ニ倣フ可ク然シテ后丁抹和蘭瑞西之ニ運キ佛蘭西英国亜米利加日耳曼露西亜ノ大国モ亦其気燄ヲ日本国ニ墜サヽランカ為メ最後ニ至リテ為ス可シト雖モ已ニ其機ニ後ルト謂フ可シ果シテコレ誰ノ過チソヤ諺ニ之アリ曰ク饗燕ノ席ニ最後ニ来ルモノハ僅ニ唆餘ノ骨ヲ得ルト嗚呼

外務省